

ほなほな歴史通信

第45号
2007.12.1

観光の町大子に

世は挙げて観光時代、何処の市町村も観光に力を入れている。世界中がそういう傾向にある。発展途上国も例外ではない。特にこれといった産業や資源があるわけでもない町にとっては、観光でお客を呼び込み収入を図ることは大事な産業である。大子町でも各方面の方が工夫を凝らし、努力して観光の発展に尽くしている。

大子には全国に有名な袋田の滝があるが、それ以外には残念ながら全国的に有名な物は少ない。

なにか観光に役立つ事はないものか、行政も町民も観光発展のために力を合わせて行くことが大事だ。

たとえば久慈の清流や里山の景観も都会の人から見れば美しい。水郡線は車窓からみる風景が美しいという人は多い。最近スケッチに来る人もよく見かけられる。古分屋敷などはかなり知られているようである。

スケッチのメッカは信州だ。春先、野山に桜が咲いていても高山は白銀に覆われている、こういう他に追従を許さない風景がある信州でさえも、スケッチのためにポイントとなる場所を観光客のために整備している。

上の絵は平成十年頃の信州のある場所、吊り橋のあるスケッチをする人にはよく知られているポイントである。下の絵は同じ場所を最近に書いた絵である。油絵と水彩で比較しにくいのが、きれいに整備した事がわかる。

ここを訪れる多くの観光客の便利を考えての事である

素晴らしい風景があっても藪の中から眺めるようでは、絵を描く事も出来ない。観光客にも敬遠される。



大子には絵になる風景は多いと思う。そういう場所をすこし整備するだけで絵を描く人達は勿論、観光客も景色を眺めて楽しむことができる。

交通の便やトイレなどの設備があれば更に歓迎される。

一挙には難しいと思うが、観光資源を掘り出す事は重要だ。幸い大子町には絵に造詣の深い方が多くいる。そういう方の意見を参考にスケッチポイントを探して整備してはどうだろう。少しずつでも整備されればそれだけ観光の発展に役立つものと思う。

大子町が誇れるこの素晴らしい自然を多くの人に眺めて貰い、大子町が観光の町として発展出来る事を望んで止まない。



(石井)

稻荷神社の棟札(一)

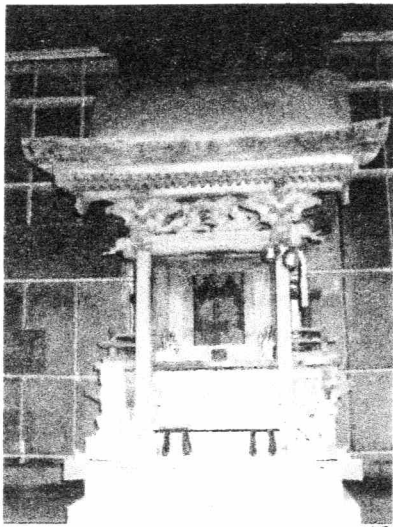
大子町初原字辰口の稻荷神社(祠)

稻荷神社ほど広い分布をもつ神様はいない。全国神社の三分の一は、稻荷神社で、大小四方社近くが祀られている。

稻荷信仰は、もともと水田耕作を行う人々の農業神であったが、平安時代の頃から一般民衆の信仰の対象として定着していった。その後、中世から近世にかけて、工業、商業が盛んになると、稻荷神社は農業の神、商工業の神、屋敷の神として信仰され、各地に勧請されていった。稻荷信仰は広い分布を持ち、農村では五穀豊穡の神として、漁村では豊漁の神として、町では商売繁盛の神として、それぞれの信仰を集めていった。

稻荷神社というと、狐が神様と思っている人が多いが、稻荷神社の祭神は「宇迦之御霊神」であり、狐は稻荷神の使いである。

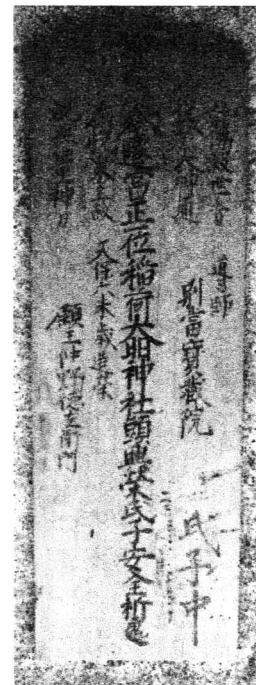
大子町初原字辰口の稻荷神社は、大子―須賀川線の県道沿いの麓に鎮座している。現在の社殿は道路拡張にともない、平成二年二月に新たに雨覆い一棟を造り、遷宮したものである。正面に新たな鳥居を造り、鳥居の両サイドに稻荷神の使いである



狐を相對させている。

社殿には、正面の向拝に素彫りの竜、柱の上方に突き出した獣面の木鼻などの装飾が取り付けられ、色彩はされていないが立派なものである。この社殿の中に、江戸時代の棟札が四枚

明治時代の棟札が二枚、昭和時代の棟札が二枚、計八枚納められている。一番古いものは、天保六年(一八三五)のもので二枚ある。紹介する(一枚は略す)。



諸佛救世者

住於大神道 奉遷宮正一位稻荷大明神社頭與榮氏子安全祈処 為悦衆生故 現無量神力

導師

別当宝蔵院

氏子中

天保六年未歳造榮

願主仲野徳左衛門

天保六年未歳常陸国久慈郡水戸領保内三ヶ草

奉納正一位稻荷大明神社殿細工棟梁龜福軒大関平蔵康隆

辰口の稻荷神社は天保六年、今からおよそ二〇〇年前に造営されている。棟札の願主は仲野徳左衛門、祭りをとりもつていたのは、導師別当宝蔵院である。稻荷明神の建築にあつたのは、水戸領保内三ヶ草(旧宮川村三ヶ草)生まれの社殿細工棟梁龜福軒大関平蔵である。

棟札には建物の建築などが終わった時に、年月日や棟梁名、寄進者名などが記されているので、建物などの建築や改築年代などが知られ、また、技術系統などを知る重要な手がかりとなる。幸い辰口の稻荷神社は、保存管理がよいため、棟札なども痛まらずに保管されてきている。

(小澤)

生瀬の道標

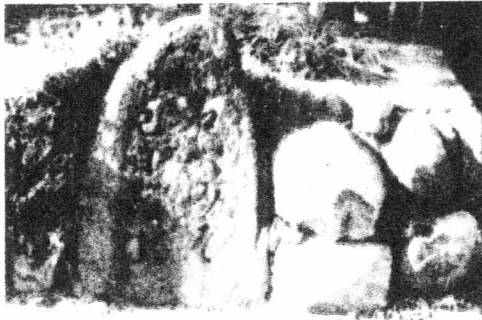
安藤政蔵

私の住んでいる常陸太田市（茨城県）から八溝山の麓までは、およそ六〇kmある。八溝へ探石に行く時、コースはいくつかあるが、水府村を通って行くのが一番近くて早く着く。所要時間は一時間三〇分ほどである。

途中、大子町に出るまで信号機が少なく、朝夕を除いて交通量も少ないので助かる。山田川の溪谷沿いに走るの、景色は至つてよいが北へ進むにつれて道が狭くなり、県道なのに車同士すれ違いできない所もある。曲がりくねって見通しが悪いところは、カーブミラーを頼りにして走っている。

一昨年、水府村高倉の竜神ダムに、日本一の竜神峡大吊橋ができたため、道路は大分整備されて走りよくなった。

当時は月一回程度、八溝川の探石を続けていた。ところが思いがけず、この道を毎日通う仕儀となった。昭和五八年四月から、大子町生瀬の内大野小学校に、校長として勤務することになったからである。



生瀬の道標

生瀬は常陸太田市から約四〇kmあり、以前なら通勤できず、単身赴任するようであった。車で五〇分まで学校に着くが、道はところどころ至極狭いので難儀である。もう一つの難儀は、雪が降って道路に積もり、凍結した時は冷汗ものである。積雪四〇〜五〇cmの時も

あった。

生瀬には、歴史の表に出ない悲劇があったと伝えられている。それは、まだ水戸藩が確立されていなかった頃、年貢徴収に来た役人とのいざこざから、村人が皆殺しにあったとのことである。実に悲惨な話であり、土地の人は語りたくないわけである。

さて、その年の秋、私は偶然、通勤の道すがら面白い道標を見つけた。場所は、小生瀬から袋田に通じる旧道のT字路である。それは高さ五〇cm程の石碑であったが、刻まれた文字に目をやり、思わず「ええっ」と驚いた。

なんと碑には、「右やみそ、左日光山」と、刻み込まれているのである。右へ行くと闇夜で暗く、左をめざせば日も差して明るいといっている。それは、人生の岐路に立つ旅人に、進路を示しているかのようである。

この道標は、日光山、八溝山の霊場巡拝者の道案内として建てられたものである。無明と光明と、実に対照の妙を得た、珍しい道標といえよう。

道標について、印象に残っている話がある。志を果たせず都落ちした若者が、備前辺りの岐れ道にさしかかった。道標を読むと、「右くらし、左つらし」とあるので、若者は落胆する。通りあわせた老人が、落ち葉をかきよせると文字ができて、「右くらしき、左つらしき」であったという。失意の目で見ると、マインナス思考になってしまうよ、ということを教えてくれる話なのである。

さて、この生瀬の道標を、石好きの私が読むと、「右やみそ」は「石やみそ」となる。即ち、「右」が「石」に見えて、都合よく「石は八溝石」と読んでしまうのだから、我ながら困ったものである。

注：本稿は安藤先生の著作『石は友達』から転載しました。

（常陸太田市在住）

「八幡潰し」と堰ノ上の八幡様

天下分け目の関ヶ原の合戦後、我が故郷が佐竹氏から徳川氏に移るや、水戸二代藩主徳川光圀は、寺社改革を断行した。特に阿弥陀如来を本尊とする八幡神社は神仏分離により「八幡潰し」にあい破却された。また、八幡神社が旧領主佐竹氏の守護神であったこともそれに拍車をかけた。芦野倉村の吉田神社も、池田村戸之内の静神社も森平の吉田神社も、栃原村の鹿島神社も、もとは八幡神社だったが佐竹氏ゆかりの神社として、元禄九年（一六九六）に社名を改めさせられた。

佐竹氏家臣の荒蒔氏の築いた上郷の館城跡の本丸跡に上町の飯村家の氏神・八幡様が祀られている。水戸光圀は飯村家に度々来訪し懇意にしていた関係から、飯村家の八幡神社には目をつぶった訳とも思えないが、氏神や坪神などは整理を免れたようだ。



以前、堰ノ上の吉成喜一さんから「堰ノ上にある八幡様は総ケヤキ造りで一見の価値がある」との話を聞いたことがあったが、館の八幡様と同様、氏神ゆえに潰されなかったのかと思う。

早速、地元の益子慶介さんの案内で八幡様に登った。杉木立の中の鳥居をくぐり古い石段を登ると囲い小屋の中に八幡様がある。益子さんによると「昔は太い藤がからまったデガイ樫の木や樺があつてデガイカブツがいくつも残っていた。地元には先祖

が越後からきた宮大工がいて、この境内の樺で作ったんではないかと聞いている。またお宮ができた時に素人相撲をやったという。場所が吉成栄さんの畑で、みんなで見物したという話を親から聞いている」そうだ。

八幡様は銅板葺の流れ造で基礎から棟まで高さ凡そ七尺、正面の向拝柱の上の斗拱と呼ばれる組物が、地垂木だけの一重の軒先を支えている。向拝柱と身舎の柱をつなぐ海老の背中のように湾曲した海老虹梁、高欄をつなぐ擬宝珠柱など全て樺作りである。木鼻や懸魚や彫刻はなく絢爛豪華さはないが、質素かつ重厚な造りで一見の価値がある。古い棟札から祭神は「八幡大神應仁（註、應神カ）天皇」で、新羅征伐で有名な神功皇后の御子、菅田別命で勇武の神である。ご神体は金幣で昔は刀があつたが誰かに盗られてしまったという。また「明治四拾壹年旧四月吉日」に「益子六戸、吉成式戸」で神社を造営改修したことを記した棟札も奉納されており、素人相撲をやつたのは、この時なのだろう。

益子さんによれば八幡様は「益子と吉成の八軒の氏神で、昔は二月十五日がお祭り、オベツトサマにヘイソクを切ってもらい注連縄もじつて、鳥居とお宮にしめ縄張つてオミキスズを下げた。初めはお宮の前にムシロすいで家族全部集まつてやつた。寿司ぶつたり羊羹作つたりゴツツオ作つてやつたから、ヤドはヨオダなかつた。酒の買えない時はヤドでドロク作つた。ほんの少しの酒はお神酒としてアゲた。ドロクはよくできた時と『スツカクでだめだ』なんて年によっていろいろだった。その後は山からヤドに移して家族全部でやり、今は会費で二月のヤドの都合のいい日に、八人で魚傳や荒川でやっている」と云う。堰ノ上の八幡様に限らず、時代の波は「今は昔の語り草」にしてしまう。古き時代に思いを寄せながら益子さんと苔むす石段を下り八幡様を後にした。（飯村尋道）

ふるさと歴史講座現地巡り

平成十九年度大子町教育委員会主催の「ふるさと歴史講座現地巡り」は、町内コース、七福神コース、昔話・伝説コース、男体山麓コースの四コースを設定して実施した。

○第一回 九月二十九日(土) 町内コース

今回の現地巡りは、町内の主な史跡等を選び実地見聞した。

・池田橋架設記念碑：昭和四年当時の池田村が工費一万五千五百円で建設した。記念碑は中央公民館入口にある。

・松沼の地藏尊：慶長三年(一五九八)子安地藏尊として創設された。その後泉町の角に堂宇を建立した。その後松沼橋の改修工事により松沼の現地に移された。

・根本正胸像の台座：根本正は水郡線の全線開通に努力した人である。だいが小学校敷地内にある台座は、昭和五年に建設された。

その外には、久慈川の護岸とけやき群、松沼橋の歴史、小久慈嵐山、小久慈橋、醍醐名水、大子城跡、大子陣屋跡と文武館、だいが小学校内のけやき群、観音堂と芭蕉の句碑を巡った。

○第二回 十月六日(土) 七福神コース

大子町に住んでいながら「七福神」を見たことがない人が多いのではといわれている。今回は七福神とはどのような神様なのかについて見聞した。その中の一つ「毘沙門天」は、もとはインドの神様である。中国では多聞天として崇拝され四天王のひとり北方守護神で、厳しい顔で勇気を与え、笑顔と財産を授ける神様である。上杉謙信は「毘」の字を旗印にしている。今回は龍泰院(袋田)、長福寺(頃藤)、実相院(内大野)、慈雲寺(町付)、高德寺(上郷)、性徳寺(下金沢)、永源寺(長岡)の順に見聞した。

○第三回 十月二十日(土) 昔話・伝説コース

昔話や伝説は、名もない庶民の苦しい労働と生活の中から生まれ、人々の暮らしの中で親から子へ、子から孫へと語り継がれてきた。こうした伝承を通して、子どもに対しては伝承などの語りを通して子どもを戒め、心を鍛えるしつけの役割を果たしてきている。今回見聞した一つを紹介すると

・矢田の「一夫二妻の三狐」の話：矢田の要害の狐塚に棲む雌狐(おさん)、仲山の狐塚に棲む雄狐(慎吾)、工業団地の東方(中町)の川沿い近くの狐塚に棲む雌狐(お夏)の三頭が慎吾の統率のもとに農作物などを荒らした。狐をこらしめたがひどい仕返しをされたので、こらしめることは控えたという。

その外、見落岩跡、近津神社、関門跡、塩吹穴観音、矢田城跡、鬼子母神社、花室神社、越方神社、野内館跡を見聞した。

○第四回 十一月十七日(土) 男体山麓コース

今年の講座の最終回は、男体山麓の史跡等を巡った。男体山や長福山は火山活動によってつくられた山である。男体山の南側や西側は、屏風を立てたように急峻な断崖の岩肌が露呈している。この岩肌は男体山火山角礫岩と呼ばれ、固い火山噴出物の地層である。火山の噴出物を出した火口は長福山であるという。当日は紅葉の時期と重なり多くのハイカー、観光客と出会った。

見聞した一つ男体神社は、滝倉道から長福坪を少し右に入ると、大鳥居、杉並木の奥に社殿がある。神社の由緒によると、神社は大同二年(八〇七)の創建、祭神はいざなぎの命、例祭は四月八日、男体山参拝祭で農耕開始にあたって、嵐除けと豊作の祈願等が行われている。その外、北田気地藏堂、袋田しよ淵、長福観音、弘法堂、不動滝、西金駅記念碑、関戸神社と渡し場跡、館城跡を見聞した。

大子町をかいま見て

田村仁一

大子町に来てそろそろ十三年になります。先般、中央公民館で衛星放送を利用した「教養セミナー」に参加した時、なにげなく「ふるさと歴史講座現地巡り」に申し込み、四日間のコースの仲間に入れてもらいました。大子町の歴史など何もわからないのでどんな講座が開かれるのか興味津々でした。

初日の九月二十九日は「大子町内コース」で九時から十四時頃まで途中休憩や昼食を挟んで所要所で講師の説明を聞きながら、時折質問したりと徒歩でゆつくりと回りました。普段車で通りすぎているその道の側に、伝説の悲話や秘話があることに驚き、今までは気にも留めていなかった石碑などが伝えている歴史を感じる事ができました。

この後の三コースはマイクロバスで現地に行きその周辺を見て回りました。

十月六日の「七福神コース」は大子町に来た年に案内図を頼りに探しましたが結局わからない思い出があり、十三年ぶりに参拝する機会を得た今回は、幸運にも各寺のご厚意により、普段見る事の出来ない神様を拝見させて頂きました。

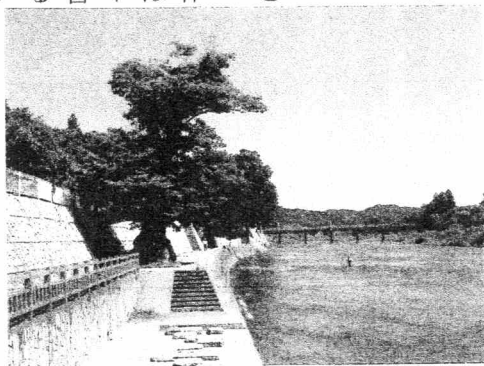
十月二十日の「昔話・伝説コース」は、医療もない苦しい生活の中で起きた事変や事故をカツパや馬・狐・蛇などの動物に例えて伝えたのかとも思う、赤ちゃんや育たない事で安産を願う鬼子母神や、後冥賀の潮吹き岩穴の塩をなめるとお乳がよく出る話、近津神社の神馬のお腹をくぐるとハシカにかからないなど、少しは昔の人の

気持ちを知ることができた。

十一月十七日は、紅葉真っ盛りの「男体山麓コース」外気温度十六度とハイキングには丁度良い、北田気で難産で苦しむ狐を助けた医者良庵、しよ淵の名前の由来、長福観世音の三二八段の階段、男体山神社の裏の滝、弘法堂近くから見る鷹取岩と入道岩、パノラマライン途中での絶景ポイント、不動滝、西金駅記念碑、関戸神社と渡し跡、頃藤故城跡の空堀などなど、中には案内説明を受けなければ何となく通り過ぎてしまう場所もあり、もう少し案内板や説明板が充実していたらと、残念に思う。今回の「ふるさと歴史講座現地巡り」に参加して、大子町を知らない町外の人に少しは案内が出来そうな気がします。講師の先生方そして一緒に回って頂きました皆さんに感謝いたします。

* 田村さんから次のような貴重なご意見を頂きました。

案内図（例えば七福神巡り）などの場所の説明は、現場をよく知っている人だけでなく、全然知らない人も参加して作らないと、始めてきた人にはわかり難い。また現地にハイキングに来られた観光客の皆さんが、楽しんで散策できる工夫をする事を考える必要があると思います。



歌声ひびく明るい町を目指して(九)

—大子混声合唱団の足跡—

ソフト・パワーという考え方がある。これを提唱したアメリカの国際政治学者ジョセフ・S・ナイは、軍事力、経済力などハードパワーに対するソフト・パワーを、「強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力」だと説明している(『ソフト・パワー』)。地域再生という難問に直面する今日、地域のソフト・パワー、つまり地域の「魅力」をいかにして高めるかが重い課題となっている。

その課題への道は多様であるが、近年注目されている切り口の一つが音楽である。十一月十五日、NHKテレビで放送された番組「クローズアップ現代」親父バンド」という生き方は興味深いものであった。スタイルにこだわらず自ら楽しむ中高年の「親父バンド」が全国に生まれ、それが地域に活力を与えたり、地域のよさに気付かせるような効果を生んでいるという。紹介された熊本県天草市牛深、岐阜県中津川市、そして鹿児島県徳之島の「親父バンド」の例は、そのことを雄弁に物語っていた。音楽を活かしたまちづくりの例は、身近なところにもある。夏の野外ロックフェスティバルで知名度を上げているひたちなか市では、音楽を街の活性化に役立てようという動きが拡がっており、行政においても、新たに策定した観光振興計画の中に音楽をまちづくりの資源として育成する方針を盛り込んだという(平成十八年八月二十六日付日本経済新聞)。

閑話休題。本誌第三十五号から四十四号にかけての八回にわたり、大子混声合唱団の足跡を明らかにしてきた。中学校の音楽教師と教え子達によって昭和二十九年に結成された合唱団は、三十八、九年の頃から活動が下火になり(本誌第三十九号参照)、

四十二年十一月の「秋の音楽祭」を最後に活動を収束させていく。合唱団の中核を担っていた人たちが三十歳代に入り、家庭を構えて作業の中心になると合唱団とは次第に隔たりができてしまったからである。加えて、過疎化の影響から若い団員を補充できなくなり、団員数が減るといふ事情も加わった。翌四十二年の春か夏、リーダーであった石島康雄さん、川俣雄司さん、池田数和さんの三人は群馬県に旅をし、「もう、どうしようもないね」ということで解散に踏み切ったという(池田氏談)。いわば、自然消滅のような形であった。

十四年間ほどの活動であったが、これまでの連載で述べたように秋の音楽祭、茨城交響楽団の招聘、「よい歌を育てる運動」等々、その内容は実に多彩であった。一時は「歌声でうまる大子町」「町ぐるみの音楽祭」(三十四年十一月十四日付産経新聞)とも紹介された活動は、前述した今日的な視点からすれば、まさに「音楽を活かしたまちづくり」そのものであったといつてよい。とくに「よい歌を育てる運動」は、合唱を楽しむ、音楽を楽しむという枠を越え、地方からの文化発信を企図する画期的な取り組みであった。茨城県合唱連盟会長を務められ、県内外の合唱団事情に詳しい相田公平さんは、公的機関が主宰する例はあるかもしれないが、私的な団体による取り組みは他にはないだろうと語っている。

ひるがえって今日、大子町でも文化ホール建設の構想が検討され、また、若者や中高年の音楽志向に応えるべく、生涯学習音楽館(仮称)が建設途上にある。この絶好の機会に、先人達の文化活動にも思いを馳せ、とりわけ本誌前号でも述べた川俣さんの作品群にも一度光を当て、町民の共有財産として評価することが求められているように思えてならない。

最後に、川俣さんが池田さんと共に大子の民謡を採譜し、編作曲した「草刈唄」を掲載して参考に供したい。(齋藤)

草刈唄 茨城県大子地方民謡
山田徳四郎氏作曲

のんびりと ♩ = 53

ハアー朝の出だけに
どの山見ても
霧のかゝらぬモー山はない
ハアー恋しなつかし
あの山ぞねに
今朝も練研ぐモー音のする
ハアー山を焼けても
山風よとはぬ
とはぬは千代かネー子がかわい
ハアー草刈りなガ
堆肥と構ひ。れ
としの作詞 山田徳四郎

編集後記

編集後記

『ほない歴史通信・第四十四号』でご紹介した教育テレビの十月四日(木)午後十時二十五分からの「知るを楽しむ・歴史に好奇心」の番組の中で、江戸時代の伊勢参宮に関連して、大子町編纂事業において発刊した『西國順礼道中記』の内容が放送されました。

大子町での撮影は八月二十九日に行われ、益子廣三郎の生家がある高柴周辺や中郷の大神宮山、袋田の滝、編集人の小澤氏が説明者として登場しました。

放送翌日から、「本を購入したい」「古文書のテキストにしたい」等の問い合わせが多く、テレビの影響の大きさを再確認しました。現在、販売できる本の在庫はありませんが、資料を発掘して発刊した先輩諸兄に感謝するとともに、この本が歴史を通して大子町の宣伝に貢献してくれました。

今後ともこれらを参考に、歴史探求に努力する所存であります。
(鈴木 徹)

編集人 斎藤 典生 (茨城大学人文学部)
野内 正美 (茨城県立大子清流高校)
石井喜志夫 (元 教員)
小澤 囿彦 (元 教員)
鈴木 徹 (大子町教育委員会)

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六九番地

T 319・3551 ☎ 0295 (72) 2627